

連鎖維持を促進する「... て、はい、」の即時文法解析

山元啓史
東京科学大学

Last updated: 2026 年 1 月 3 日

1 はじめに

本稿は連鎖の維持を促進する表現「... て、はい、」の即時文法的特徴を解説したものである。即時文法は、発話プロセスにおいて、不完全な文、言いさし表現を文法として捉える枠組みである。感覚や雰囲気理解されがちなこの表現を、体系的に理解するための手がかりを提供することを目的としている。学習の初期に遭遇することが多いこの表現を適切に教材化すれば、学習者の混乱を軽減し、自然な日本語運用能力の向上に寄与できると考えられる (Yamamoto 2025)。

2 表現: 「... て、はい、」

例 1: 連鎖維持表現「... て、はい、」の使用例

- A「昨日、パーティ、どうだった」
- B「まあ、食べて飲んで、はい、」
- A「いつもと同じかぁ」

2.1 習得が難しいポイント

2.1.1 「... て、」が未完了のまま次に渡される

問題点は、学習者は「て形＝文をつなぐ文法」と学ぶが、この例では何と何をつないでいるかが明示されていない。しかも結論を明示しない。例えば、上記の例では、

- 食べて、飲んで、(それで?)

しかし、実際には「列挙した時点で、もう言うことは尽きている」という時間に即した判断が働いている (Chafe 1994)。つまりポイントとしては、「テ形の後には何か言わなければならない」と思い込むため、文法的な完結を探してしまうことである。

2.1.2 「はい」が返事ではなく会話の潤滑油になる

問題点として、多くの教科書では「はい = yes / 返事」と教えられる。しかし、ここでは肯定でも応答でもない。実際の機能としては、話し手がまだ話す権利を保持しつつ、「もう (内容的には) 十分だよね?」という相手への確認を表す。これにより、相手への発話権の委譲がスムーズになる。これは即時文法の典型で、意味ではなくタイミングの語である (Du Bois 2007)。タイミングを示す語は、学習者にとって理解が難しいポイントであるだけでなく、教育者の意識や教材化の際にも見落とされがちな要素である。

2.1.3 情報伝達より「流れ」を優先する

この発話の目的は、内容を詳しく伝えるのでも、感想を述べるのでもなく、会話を円滑に終わらせ、相手に続きを委ねることである (Clark 1996)。見方によれば、自分の発話権を手放すための表現とも言える。意図的に利用するならば、発話権を相手に移譲する信号を用いることによって、自分の不足している語彙量を相手に補完してもらうことができる。

学習者がこの言いさしを聞いている場合は「何を言っているのか」を理解しようとして失敗するが、「どこで息を渡しているか」、言い換えれば、「自分が話さなければならない番である」ことを感知し、コミュニケーションを継続し、成功させるのが課題となる。感知したら、どのような内容、あいづち、反応、表情でもよい。返答がなめらかに続けられれば、成功である。いわゆる「上手な聞き手」になる。

2.1.4 調整文法では、同等の表現はない

この表現は伝統的な文法では表現されない (Levinson 1983)。即時という時間的制約がないため、このようなやりとりは不要になる。時間的余裕があり、情報伝達が優先される場合であれば、相手との距離を測りながら、いくぶん丁寧な表現が選択される。たとえば、

- 即時: ... て、はい、
- 調整: ... して、そうですね、(何らかの評価語、例えば「おいしいですね」など)

このように、調整文法では明示的な評価語、丁寧な間投詞が必要になる。

学習者は「なぜ日本語話者は、そんなに短く済ませられるのか」と混乱するかもしれないが、今、まさにここで起こっているという即時的なインタラクションで十分な共有が成立しているからである。

2.2 この表現が「即時文法」だと一目でわかる理由

表1: 即時文法の特徴

| 要素 | 即時性 |
|----|------------|
| テ形 | 結果を言わない |
| はい | 応答でも同意でもない |
| 文末 | 意図的に開いたまま |
| 機能 | 情報 < タイミング |

表1 は、不全文がどのように相互行為を前進させるかを示す好例である。文法構造の中に最終的な結論を示すノードが存在しない。これは、発話が未完了であることを示している。「食べて、飲んで、」は行為の列挙

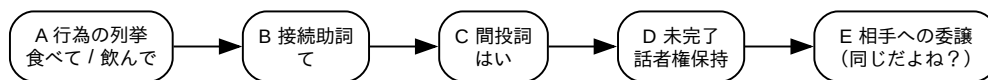


図1: 連鎖維持装置「... て、はい、」の即時文法構造。ポイントは、どこにも「結論ノード」が存在しないことである。

を示し、これ自体が完結した文ではない。「はい、」は通常の応答や同意を示すものではなく、会話の流れを維持するための間投詞として機能している。発話者は「はい、」を用いることで、自身の発話権を保持しつつ、相手に発話の機会を委譲する意図を示している。これらは、従来の完全文を前提とした文法体系では説明できない特徴である。

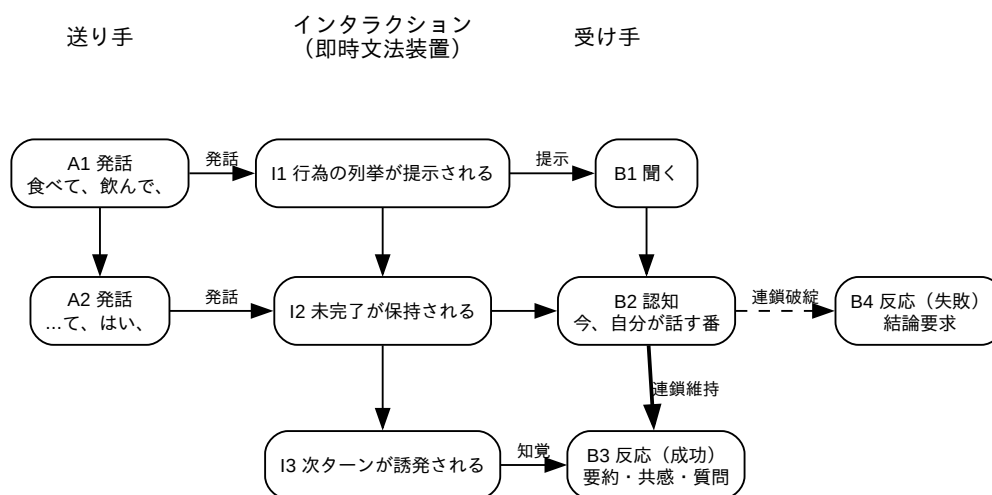


図2: 連鎖維持装置「... て、はい、」の即時インタラクションモデル。発話者が行為の列挙を提示し、未完了の状態を保持することで、受け手に次の発話ターンを誘発する (Schegloff 2007)。

3 教材化するときのポイント

教材化の際には、以下の点に注意する。「意味を説明しない」ことが重要である。意味ではなく、発話のタイミングに注目させる。意味を与えると正解を言わなければならないと考えてしまう。また、正解文を与えないことも重要である。学習者が自分で発話のタイミングを感じ取ることができるようにする。使われた位置だけを示し、学習者が自分で判断できるようにする。これを前後の発話とセットで提示する。評価は、発話がスム

ーズに続けられたかどうかで判断する。内容の正確さではない。

4 おわりに

「... て、はい、」は従来の記述文法的には壊れているが、会話的には、発話の実態に即しており、パターンとして記述できる表現である。情報伝達よりも会話の流れを重視しており、実際のコミュニケーションに即している。なお、この表現は、AEAD number 627 (2025.12.28) に登録されている。

References

- Chafe, Wallace L. (1994). *Discourse, Consciousness, and Time*. University of Chicago Press.
- Clark, Herbert H. (1996). *Using Language*. Cambridge University Press.
- Du Bois, John W. (2007). “The Stance Triangle”. In: *Stancetaking in Discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*. Ed. by Robert Englebretson. Vol. 164. Pragmatics & Beyond New Series. John Benjamins Publishing Company, pp. 139–182.
- Levinson, Stephen C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge University Press.
- Yamamoto, Hilofumi (2025). *Process Grammar Model*. Version v1.0.11. DOI: 10.5281/zenodo.15613134.
URL: <https://doi.org/10.5281/zenodo.15613134>.